

自然居士

観阿弥作

狂言 東山の人

シテ 自然居士

子方 女兒

ワキ 人商人

ワキヅレ 同

地は 始は山城 後は近江

季は 雑

狂言

「かやうに候ふ者は。東山雲居寺のあたりに住居仕る者にて候。こゝに自然居士と申す喝食の御座候ふが。一七日説法を御述べ候。今日結願にて御座候。皆々参りて聴聞申し候へ。

シテ詞

「雲居寺造営の札召され候へ。夕べの空の雲居寺。月待つ程の慰めに。説法一座述べんとて。導師高座に上り。発願の鉦打ち鳴らし。慎み敬つて白す。一代教主釈迦牟尼宝号。三世の諸仏十方の薩埵に

申して白さく。総神分に般若心経。や。是は諷誦を御上げ候ふか。

狂言

「實に是は美しき小袖にて候。急いで此諷誦文を御覧候へ。

シテ

「敬つて申し受くる諷誦の事。三宝衆僧の御布施一裹。右志す所は二親聖靈頓証仏果の為め。身の代衣一重。三宝に供養し奉る。彼西天の貧女が。一衣を僧に供ぜしは。身の後の世の逆縁。今の貧女

は親の為め。

地「身の代衣恨めしき。く。浮世の中をとく出でゝ。

先考先妣諸共に。同じ台に生れんと。読み上げ給ふ自然居士。墨染の袖を濡らせば。数の聴衆も色々の。袖を濡らさぬ人はなし。く。

ワキ詞「かやうに候ふ者は。東国方の人商人にて候。我此度都に上り。数多人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候ふが。昨日少しの間暇

を乞ひて候ふ程に遣りて候ふが。未だ帰らず候。なふ渡り候ふか。昨日の幼き者は。親の追善とやらん申して候ひつる程に。説法の座敷にあらうずると存じ候。自然居士の雲居寺に御座候ふ程に。立ち越え見うずるにて候。

ツレ「然るべう候。

ワキ「や。さればこそ是に候。なふ急いで連れて御入り候へ。

狂言「やるまいぞ。

ワキ「用がある。

狂言「用が有らば連れて行け。如何に居士へ申し候。

シテ「何事にて候ふぞ。

狂言「唯今諷誦を上げて候ふ女を。荒けなき男の来り候ひて追つ立てゝ行き候ふ程に。遣るまじきと申し候へば。用があると申し候ふ程に遣りて候。

シテ「あら曲もなや候。始めより彼女は様有りげに見え

て候。其上諷誦を上げ候ふにも。唯小袖とも書かず。身の代衣と書いて候ふよりちと不審に候ひしが。居士が推量申すは。彼者は親の追善の為に。我身を此小袖に替へて諷誦を上げたると思ひ候。さあらば唯今の者は人商人にて候ふべし。彼は道理此方は僻事にて候ふ程に。御身の留めたる分にてはなり候ふまじ。

狂言「人商人ならば東国方へ下り候ふべし。大津松本へ

某走り行き留めうずるにて候。

シテ「暫く。御出で候ふ分にてはなり候ふまじ。居士此小袖を持ちて行き。彼女に代へて連れて歸らうずるにて候。

狂言「いやそれは今日までの御説法が無になり候ふべし。

シテ「いや／＼説法は百日千日聞し召されても。善惡の二つを弁へん為めぞかし。今の女は善人。商人は悪人。善惡の二道こゝに極まつて候ふは如何に。

今日の説法は是までなり。願以此功德普及於一切。我等与衆生皆共成。仏道修行の為めなれば。

地「身を捨て人を助くべし。

ワキ「今出で、其処ともいさや白波の。此舟路をや急ぐらん。

シテ「舟なくとても説く法の。

地「道に心を留めよかし。

シテ詞「なふ／＼其御船へ物申さう。

ワキ詞

「是は山田矢橋の渡舟にてもなき物を。何しに招かせ給ふらん。」

シテ

「我も旅人にあらざれば。渡りの舟とも申さばこそ。其御舟へ物申さう。」

ワキ

「さて此舟をば何舟と御覧じて候ふぞ。」

シテ

「其人買舟の事ぞふよ。」

ワキ

「あゝ音高し何とく。」

シテ

「道理々々。よそこにも人や白波の。音高しとは道理

なり。人買と申しつるは。其舟漕ぐ櫂の事ぞふよ。

ツレ

「艫には唐艫といふ物あり。人買と云ふ櫂はなきに。

シテ

「水の煙の霞をば。一霞二霞。一汐二汐なんどゝいへば。今漕ぎ初むる舟なれば。一櫂舟とは僻事か。

ワキ

「実に面白くも述べられたり。さてく何の用やらん。」

シテ

「是は自然居士と申す説経者にて候ふが。説法の場合をさまされ申す。恨み申しに来りたり。」

ワキ 「説法には道理を述べ給ふ。我等に僻事なき物を。

シテ 「御僻事とも申さばこそ兎に角に。本の小袖は参ら
する。舟に離れて叶はじと。裳裾を波に浸しつゝ。
舟ばたに取り付き引きとゞむ。

ワキ 「あら腹立やさりながら。衣に恐れて得は打たず。
是も汝が科ぞとて。艫櫂を持つて散々に打つ。

シテ 「打たれて声の出でざるは。若し空しくやなりつら
ん。

ワキ 「何しに空しくなるべきと。

シテ 「引き立て見れば。

ワキ 「身には縄。

地 「口には綿の轡をはめ。泣けども声が出でばこそ。

シテ詞 「あら不便の者や。やがて連れて帰らうずるぞ心安
く思ひ候へ。

ワキ詞 「なふ自然居士舟より御おり候へ。

シテ 「此者を賜はり候へ。小袖を召され候ふ上は御損も

候ふまじ。

ワキ「参らせたくは候へどもこゝに笑止が候。

シテ「何事にて候ふぞ。

ワキ「さん候我等が中に大法の候。それを如何にと申すに。人を買ひ取つて再び返さぬ法にて候ふ程に。

え参らせ候ふまじ。

シテ「委細承り候。又我等が中にも堅き大法の候。かやうに身を徒になす者に行き逢ひ。若し助け得ねば。

再び庵室へ歸らぬ法にて候ふ程に。其方の法をも破るまじ。又此方の法をも破られ申すまじ。所詮此者と連れて奥陸奥の国へ下るとも。舟よりはおりまじく候。

ワキ「舟より御おりなくは拷訴を致さう。

シテ「拷訴といつぱ捨身の行。

ワキ「命を取らう。

シテ「命を取るともふつゝと下りまじい。

ワキ「何と命を取るともふつゝと下りまじいと候ふや。

シテ「中々の事。

ワキ「いや此自然居士に持て扱うて候ふよ。なふ渡り候ふか。

ツレ「何事にて候ふぞ。

ワキ「さて是は何と仕り候ふべき。

ツレ「是は御歸しなうては叶ひ候ふまじ。よくく物を案じ候ふに。奥より人商人の都に上り。人に買ひ

かねて。自然居士と申す説経者を買ひ取り下りたるなんと、申し候はゞ。一大事にて候ふ程に。御歸しなうては叶ひ候ふまじ。

ワキ「我等も左様に存じ候ふさりながら。唯歸せば無念に候ふ程に。色々になぶつて歸さうずるにて候。

ツレ「尤然るべう候。

ワキ詞「なふく自然居士急いで舟より御上り候へ。

シテ「いやく聊爾には下りまじく候。

ワキ「何の聊爾の候ふべき唯御上り候へ。

シテ「あゝ船頭殿の御顔の色こそ直つて候へ。

ワキ「いやちつとも直り候ふまじ。又是なる人の申され候ふは。今度始めて都へ上りて候ふが。自然居士の舞の事を承り及びて候。一指舞うて御見せあれと申され候。

シテ「総じて居士は舞まうたる事はなく候。

ワキ「それは御偽りにて候。一年今の如く説法御述べ候

ひし時。いで聴衆の眠り覚まさんと。高座の上に
て一指御舞ひ有りし事。奥までも其聞え候ふ程に。
一指御舞ひ候へ。

シテ「あうそれは狂言綺語にて候ふ程に。左様の事も候
ふべし。舞をまひ候はゞ此者を賜はり候ふべきか。

ワキ「先づ御舞を見て。其時の仕義によつて参らせ候ふ
べし。是に烏帽子の候。是を召して御舞ひ候へ。

シテ「よくく物を案ずるに。終には此者を賜はらんず

れども。唯歸せば損なり。居士を色々になぶつて
恥を与へうと候ふな。余りにそれはつれなう候。

ワキ 「何のつれなう候ふべき。

シテ 「志賀辛崎の一つ松。

地 「つれなき人の心かな。（中の舞）

シテクリ 「抑舟の起りを尋ぬるに。水上黄帝の御宇より事起
つて。

地 「流れ貨狄が謀より出でたり。

シテサシ 「こゝに又蚩尤といへる逆臣あり。

地 「彼を亡ぼさんとし給ふに。烏江といふ海を隔てゝ。

攻むべき様もなかりしに。

クセ 「黄帝の臣下に。貨狄と云へる士卒あり。ある時貨

狄庭上の。池の面を見渡せば。折節秋の末なるに。

寒き嵐に散る柳の。一葉水に浮びしに。又蜘蛛と

いふ虫。是も虚空に落ちけるが。其一葉の上に乗

りつゝ。次第次第に笹蟹の。いとはかなくも柳の

葉を。吹きくる風に誘はれ。汀に寄りし秋霧の。
立ちくる蜘蛛の振舞。実にもと思ひそめしより。
巧みて舟を造れり。黄帝是に召されて。烏江を漕
ぎ渡りて。蚩尤を安く亡ぼし。御代を治め給ふ事。
一万八千歳とかや。

シテ「然れば船のせんの字を。」

地「公に前むと書きたり。さて又天子の御顔を。龍
顔と名づけ奉り。舟を一葉と云ふ事。此御宇より

始まれり。又君の御座舟を。龍頭鷁首と申すも。
此御代より起れり。

ワキ詞

「如何に申し候。我等が舟を龍頭鷁首と御祝ひ候ふ
事過分に存じ候。とても事に觔を摺つて御見せ
候へ。」

シテ詞

「さらば竹を賜はり候へ。」

ワキ

「折節船中に竹が候はぬよ。」

シテ

「苦しからず候。彼仏の難行苦行し給ひしも。一

切の衆生を助けん為めぞかし。居士も又其如く。身をこつかに砕きても。彼者を助けん為めなり。夫れさゝらの起りを尋ぬるに。東山に在る御僧の。扇の上に木の葉のかゝりしを。持ちたる数珠にてさらりくと払ひしより。さゝらといふ事始まりたり。居士も又其如く。さゝらのこには百八の数珠。さゝらの竹には扇の骨。おつ取り合はせ是を摺る。所は志賀の浦なれば。

地「さゝ波や。く。志賀辛崎の松の上葉を。さらりくとさゝらの真似を。数珠にて為れば。さゝらより猶手をも摺る物。今は助けてたび給へ。手を摺るなど、承り候ふ程に参らせ候ふべし。とてもものに羯鼓を打つて御見せ候へ。

ワキ詞

地「もとより鼓は波の音。
(羯鼓の舞)

地「もとより鼓は波の音。寄せては岸をどうとは打ち。天雲迷ふ鳴神の。とゞろくと鳴る時は。降りく

る雨ははらくはらと。小笹の竹のさゝらを摺り。
池の氷のとうくと。鼓を又打ちさゝらを猶摺り。
狂言ながらも法の道。今は菩提の岸に寄せくる。
船の内より。ていとうと打ち連れて。共に都に上
りけり。く。